

調査研究

石川県における磨製石庖丁研究についての現状と若干の考察

松尾 実

1.はじめに

石川県は日本列島の中央部、日本海に面した地域にあり、北方に突出した半島を有する。古来、南は旧加賀国、半島は旧能登国に属しており、凡そ2つの地域に大別できる。すなわち、加賀地域、能登地域であり、前者には白山系や医王山系の山地、後者には宝達山系や丘陵性の台地が連なっている。

弥生時代には、水田稲作農耕文化とそれに伴った大陸系磨製石器群⁽¹⁾が朝鮮半島から日本列島の北部九州へ渡り、東へ漸次波及して当該地域にも及んだと理解されている。特に、その文化波及と受容の展開を具体的に知る手がかりの1つとして、大陸系磨製石器群は注目をあびてきた。すなわち、社会変革などの断面的、かつ、流通論、社会構造などといった平面的な研究によって弥生時代の人的活動の有機関係にアプローチできる資料と考えられるからである。近年では、各地で精緻な検討と見直しが活発に行われ、製作工程の復元研究、使用痕による機能・用途の再検討、小地域における流通圏の存在などが明らかになっている。

ところで、石川県内でも石器資料の増加に伴い、1990年代から幾度となく集成が行われてきた。それらのなかでは、大陸系磨製石器群の導入、定着、消滅過程を言及した論考が少なくなく、一定の見解がなされている。また、使用痕による精緻な研究により、機能・用途についての再検討が行われている。しかし、生産・流通については、ほとんど言及されていないのが現状といえよう。

本稿では弥生時代の特質とされる水田稲作農耕に密接に関係し、かつ、生産・流通論に関して地域的な様相を示唆する磨製石庖丁⁽²⁾を取り上げる。まず、石川県下における研究史を振り返り、整理を行いたい。そして、磨製石庖丁の石材に注目し、流通圏について若干の考察を行いたい。考察に際しては、主に対象地域を現在の石川県内を範囲とし、特に弥生時代で中期～後期にかけて長期的な継続期間を有した拠点集落とされる小松市八日市地方遺跡と羽咋市吉崎・次場遺跡、後期に盛行した金沢市西念・南新保遺跡を取り上げる。

2. 石川県における磨製石庖丁の研究史

1955年に鹿島郡御祖村（現：鹿西町小田中）から出土した石庖丁が石川県下において初出となるであろう⁽³⁾。後に浜岡賢太郎氏によって石庖丁の特異性に注目し、農耕が行われた事を示唆した。また、吉崎・次場遺跡との関連性を示唆している⁽⁴⁾。その後、石庖丁研究は停滞したが、1992年の埋蔵文化財研究会による全国的な集成作業を契機に躍進する。安英樹氏はそのまとめのなかで、製作技法よりも想定される用途を軸に石庖丁を農具の範疇に位置付け、各時期における傾向を把握した。すなわち、「中期前葉には石庖丁が存在する可能性を示唆し、中期後半から確実に存在する事で他の大陸系磨製石器群も含めて定着した。」と言及し、「西日本の石器組成に極めて近くなる。」と評価している。そして、後期には減少傾向を示し、消失するとの見解を示した。これらの集成作業は石川県下でもはじめての総体的な集成であり、そのなかで石器形式、組成、時期別量的傾向などのデータを提示し一

定の見解を示した事は重要である⁽⁵⁾。また、1995年に安英樹氏は、羽咋市吉崎・次場遺跡の石器群資料を検討材料に中期から後期における石器群の推移を考察した。用途を穂摘具とした石庖丁は、「直刃半月型が多く、主体は研磨が難な品で、大型が多い。」と指摘している。総括的な見解では、中期前半段階で全面研磨品は少なく、後期に大陸系石器群全体の石材に軟質が多くなる傾向を示唆された。また、打製の横刃石器、木庖丁に注目し、複合的な使用形態を想定する必要性を指摘した。さらに、「大陸系磨製石器を生産できる遺跡は北陸においてはかなり地域単位で限定される可能性が高い。確証はないが特定集落、おそらくは地域の中核的な集落での生産、周辺の集落への供給というような姿を推定しておきたい。」と周辺地域における社会構造を示唆した⁽⁶⁾。同年、久田正弘氏は収穫具として集成を行なった。変遷過程のなかで、石包丁は一期から法仏期まで確認でき、消滅の要因に鉄器や木器に転換された可能性を示唆された⁽⁷⁾。1999年には、木田清氏が吉崎・次場遺跡出土資料から形態による変遷を論じた。最大幅でもって特大(11~15cm) 大(8~10cm) 中(5.5~8cm) 小(4~5cm)と類型化し、時系列な傾向を導出した上で、これらの規格差から用途が違うことを指摘した。すなわち、小型は穂摘具、中型は除草具兼穂摘具、それ以上の規格は除草具とし、使い分けを行なったと推定した。そして中期では特大~小までの種類が豊富であるのに対し、後期になると中型のみが残り消滅していく過程を言及し、大型品は使用頻度の低さによって消滅し、小型は木庖丁、大型は鉄器への転換を論じている。製作技法については、刃のつけ方、研磨の仕方に大小それぞれの差異がないと確認された⁽⁸⁾。2001年に安英樹氏は、北陸の拠点集落とされる吉崎・次場遺跡、八日市地方遺跡を例にとり、流通に関して示唆に富む見解を示している。これら遺跡を物資の生産力が高い遺跡として評価している。そして、「原料などを遺跡外から遠隔地・近郊地を問わず確保し集積する機能が高かつた」「遺跡内で土・石・木などを素材とする製品の生産力が高い。おそらくは、原材料を遺跡外から獲得・集積し、完成品は遺跡外へ供給するといった生産・流通機能が備わっていたと想定される」と言及し、主に水系で結ばれたネットワークを介したと想定した⁽⁹⁾。2002年、久田正弘氏は、使用痕研究から磨製石庖丁の用途を石製収穫具として位置付け、形態幅と使用痕の組み合わせからその機能について論じた。すなわち、小型のものは刃に直交する形で片側に使用痕があり、穂摘みを行なったと推定し、それ以外のものは刃に対し平行で幅広な使用痕があることから横に引いて切断したと推定した。また、石川県では穂摘具は少なく、穂刈ないし根刈りの収穫具が多く確認できる状況を示している。なお、大~特大型といわれる石庖丁については、オシギリ的に使用された農具との視点を提示しており興味深い⁽¹⁰⁾。2003年には宮田明氏が詳細な遺物の検討を行った。層状に剥離した板状薄片を素材として一辺に刃部を有する石器全てを「石庖丁」とした。一方、石庖丁未成品についても言及している。一見打製石庖丁の一種と考えられるものでも使用痕が観察されない等の観察から刃部加工途上の石庖丁未成品の破損品として認識されており、従来の打製石庖丁の認識を改める必要性を提起している。また、成品の平面形態は台形~半月形が多いが、石庖丁が破損しても使用している事例を紹介している。石材に関しては、流紋岩類が最も多く、他に珪質頁岩や粘板岩のような堆積岩系の石材が多いと報告されている。なかでも、流紋岩(層状の石理が発達して板状に剥がれやすい石材)は、産出地を山中地域と推定されている⁽¹¹⁾。

以上の磨製石庖丁研究史から看取される現状についてまとめてみたい。

- ・時期的な変遷過程については、磨製石庖丁が中期には確実に出現し出土量も多い。規格は多様化するが、後期になると衰退し消滅する。この頃には規格も少なくなるようである。その要因を穂摘具・収穫具が鉄器や木庖丁へと転換した事象として捉えられている。
- ・機能・用途については、使用痕研究によって機能を精緻に検討し、農具 穂摘具 収穫具へと認

識されている。また、5 cm以下の小型は穂摘み具、5.5~8 cmの中型は穂摘具兼除草具(収穫具)中型以上も収穫具といった規格による類型化がなされている。

- ・生産・流通については、石庖丁の然るべき石材獲得のための露頭、石材の薄片、多くの未成品が出土する遺跡が未発見なため、積極的に言及されている論考は多くないのが現状といえよう。しかし、他の石材に関しては一定の範囲が認められている。例えば、大陸系磨製系磨製石器群の一つである大型蛤刃石斧については、吉崎・次場遺跡で未成品が出土していることから、生産地として考えられており、そこから広範囲にわたる供給が想定されている。他に、能登地域の富来周辺を産地として想定されている輝石安山岩は主に石鎚石材で、弥生時代に限れば長期間に亘って広範囲に流通している⁽¹²⁾。また、手取川流域を産地とする安山岩は主に打製石斧などの石材とされ、手取川扇状地を中心として流通している⁽¹³⁾。富山県東部を産出地として推定されている蛇紋岩は、主に石斧石材として流通している。近年では小松市八日市地方遺跡出土の石器石材の一つである流紋岩の生産地は山中地域を推定されている。
- ・社会構造については、地域における中核的な集落が生産を行い、周辺の集落への供給するシステムを想定されている。

3. 石川県下における磨製石庖丁からみた流通圏について

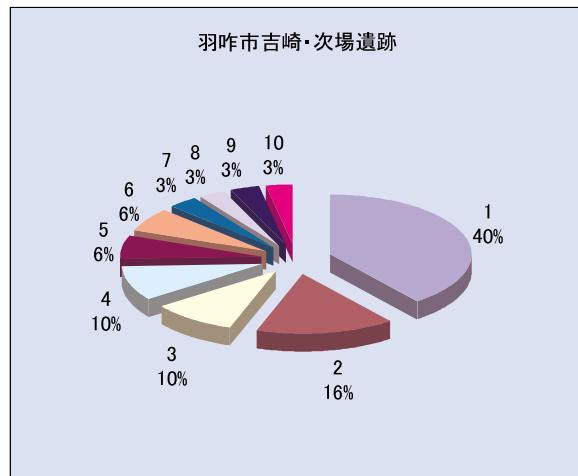
このように、磨製石庖丁研究は時期的な変遷課程での量的傾向の把握や機能・用途について着実に進歩している。しかし、生産・流通論は、資料の制約があるためか活発な議論が多くなされていないのが現状であろう。そのなかでも、安英樹氏による拠点集落論のなかでの「遺跡内で土・石・木などを素材とする製品の生産力が高い。おそらくは、原材料を遺跡外から獲得・集積し、完成品は遺跡外へ供給するといった生産・流通機能が備わっていた。」と想定し、主に水系で結ばれたネットワークを介したとする論考⁽¹⁴⁾は重要である。この仮説を基として以下ではこれらの生産・流通に関わる流通圏について若干の検討を行いたい。

石器石材の流通形態は多様であることが考えられ、石鎚や石斧などのように遠隔地から広範囲にわたって流通したものが認められる。また打製石斧のように採取地を中心とした比較的狭い範囲での流通圏も認められる。この点に注目して大陸系磨製石器群のなかでも比較的数量のある磨製石庖丁を取り上げ、どのような流通形態が見られるのかを考察したい。まず、加賀地域と能登地域といった範囲で流通圏があるのかどうかを検討するために、その前作業として八日市地方遺跡と吉崎・次場遺跡出土のデータ⁽¹⁵⁾を基にして石材の傾向を割り出し、両遺跡を比較する。検討対象とする遺跡を2つにしほったのは、中期から後期の長期間に亘って集落が営まれていたこととその規模の大きさである。そして、2遺跡の資料点数が多いことに起因する事と、加賀、能登地域における中核的な拠点集落の様相を示しているためである。なお、北加賀地域で後期に盛行した拠点集落とされる西念・南新保遺跡も検討対象に加える。

八日市地方遺跡では、磨製石庖丁出土総計80点中、流紋岩38%、粘板岩26%、珪質頁岩13%、凝灰岩13%が主な石材構成で、6:3:1:1という比率を表しており、流紋岩系・粘板岩系の石材が多い。石材については、総じて節理(層状の石理)のある加工しやすい石材を志向する傾向があることを指摘する。生産地としては、手取川流域と山中地域などが想定され、遠隔地から石材を入手していないことが窺える。中には、素材、未成品、穿孔途中、完成品といった製作工程を追える資料があり、磨製石庖丁の製作を行っていたと考えられる。

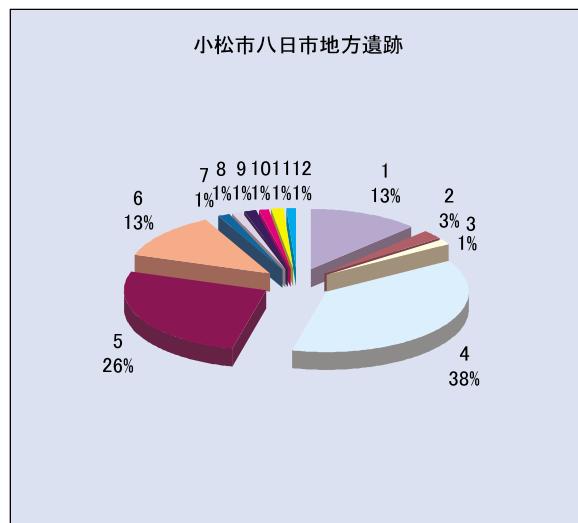
羽咋市吉崎・次場遺跡

	石材の種類	数量	構成比
1	角閃石安山岩	12	40%
2	安山岩	5	16%
3	砂岩	3	10%
4	輝石安山岩	3	10%
5	粘板岩	2	6 %
6	シルト岩	2	6 %
7	白色凝灰岩	1	3 %
8	千枚岩	1	3 %
9	片麻岩	1	3 %
10	不明	1	3 %
	合計	31	100%



小松市八日市地方遺跡

	石材の種類	数量	構成比
1	珪質頁岩	10	13%
2	安山岩	2	3 %
3	火山礫凝灰岩	1	1 %
4	流紋岩	30	38%
5	粘板岩	21	26%
6	凝灰岩	10	13%
7	玻璃質岩	1	1 %
8	砂岩・頁岩	1	1 %
9	凝灰質砂岩・頁岩	1	1 %
10	玉隨・瑪瑙・チャート	1	1 %
11	輝石安山岩	1	1 %
12	不明	1	1 %
	合計	80	100%



* 未製品は含まず。

* 1 ~ 3 は、手取川流域で採取される石材

4 ~ 10は、加賀南部の山間部で採取される石材

11は、外来石材

金沢市西念・南新保遺跡

	石材の種類	数量	構成比
1	凝灰岩	4	67%
2	凝灰岩質流紋岩	1	17%
3	流紋岩質砂岩	1	17%
	合計	6	100%



図1 拠点集落石材別構成比
(木田：1999、影山：2001)を基に作成

吉崎・次場遺跡では、磨製石庖丁出土総計31点中、角閃石安山岩40%、安山岩16%、砂岩10%、輝石安山岩10%が主な石材構成で、4：2：1：1という比率を表している。当該遺跡では、角閃石安山岩の比率が高い。節理のある石材をほとんど志向していない傾向を示す。その他の石材を実見しても、八日市地方遺跡の石材と様相を異としている。角閃石安山岩は、羽咋の海岸地域他を採取地として想定されており、これも遠隔地から石材を入手していないことが窺える。成品が多く見られるが、報告書掲載外の石器を含めて再検討する必要がある。

西念・南新保遺跡は、磨製石庖丁出土総計6点中、凝灰岩が67%、凝灰岩質流紋岩17%、流紋岩質砂岩17%が主な石材構成で、4：1：1の比率となる。これらは、他遺跡と比較して軟質で節理のある凝灰岩が多いのに注目したい。なお、凝灰岩産地の一つとして想定するならば、森本丘陵⁽¹⁶⁾を主とする医王山山系の可能性を考えたい。

これらの拠点集落における石材構成の特徴と各遺跡出土の石材から勘案すると、大きく2つの流通圏があることが考えられる。すなわち、能登地域と加賀地域である。前者は節理のない石材、後者では節理のある石材を用いて磨製石庖丁を製作したことが窺え、志向したと考えられる。また、石材比率を見ると近隣で採取される石材が多くを占めていることが分かる。つまり、磨製石庖丁に関しては、特定の石材が遠隔地から搬入されて用いられたとは考え難く、近隣から採取されたと考えられる。

以上の検討から、磨製石庖丁は特定の石材を遠隔地から搬入するような石材の志向性は看取されない。むしろ、加賀、能登地域内において石材の採取地があり、小地域内⁽¹⁷⁾での流通圏が構築されたと考えられる。さらに、その流通圏を基礎単位とする多様な需要・供給関係を有したネットワークが構築されたと想定したい。ただし、両遺跡には微量に相互の石材があることは、小地域間の流通システム

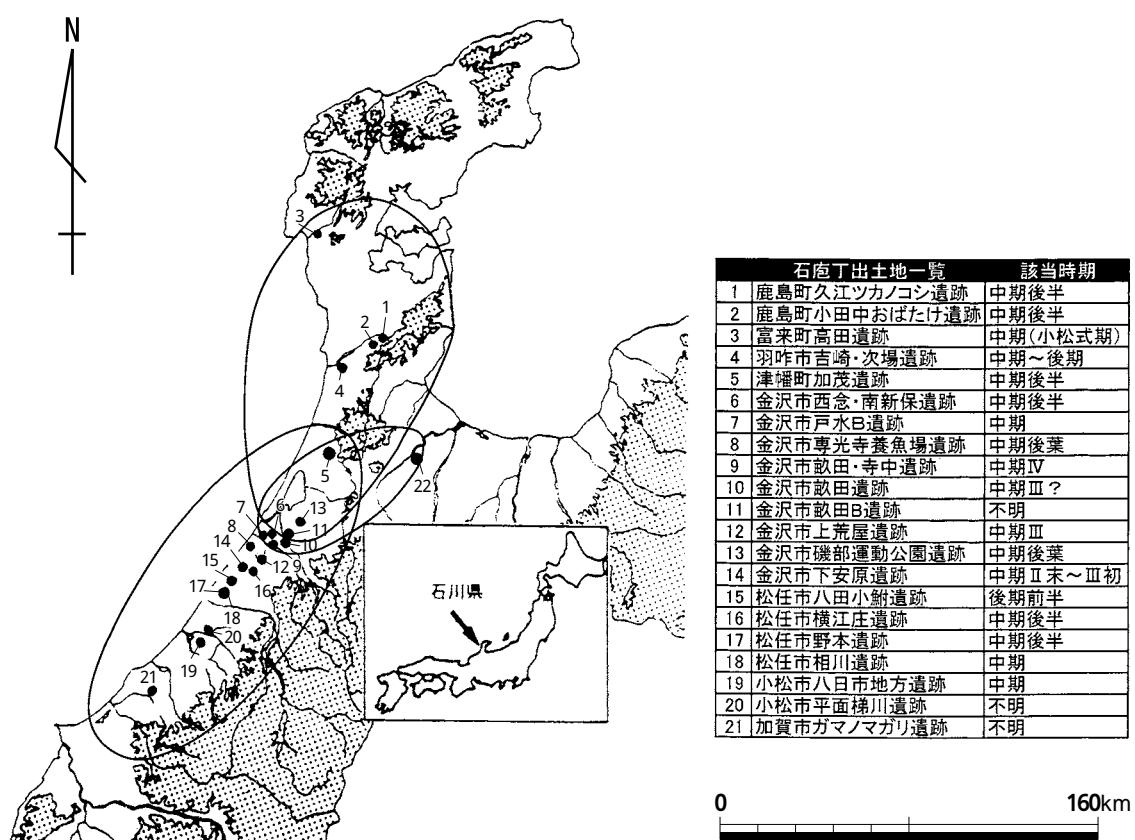


図2 磨製石庖丁流通圏想定図

ムが機能したと考えられる。そこには中心的な役割を担う拠点集落の存在が機能していた可能性を考える。

さらに、今回の検討によって新たな知見を提示したい。西念・南新保遺跡出土の磨製石庖丁の石材に凝灰岩が多いことに注目し、他遺跡出土の石材を実見したところ、金沢市磯部運動公園遺跡、同市戸水B遺跡（穿孔途中品）同市畠田B遺跡、津幡町加茂遺跡等⁽¹⁸⁾から出土している。白色系凝灰岩を石材とする磨製石庖丁は北加賀地域において散見されることから、これらを包括した一つの流通圏があったと考えられる。さらに、富山県下老子 笹川遺跡においても出土していることから、この石材の流通圏は富山県西方に位置する砺波平野にまで広がることを示唆しており、広範囲にわたっていた可能性がある⁽¹⁹⁾。すなわち、白色系凝灰岩の石材が加賀地域のなかでも北加賀地域を中心として砺波平野にまで及ぶ広範囲の流通圏があることを指摘する。なお、戸水B遺跡出土の穿孔途中品について勘案すると、拠点集落で成品化したものを周辺集落へ供給する流通形態の他に未成品を流通圏の内外を問わず供給し、需要した集落で成品化した可能性も考えられる。

流通圏は、多様で複雑に重なっていると認識している。特筆したいのは、石川県下での石材の流通圏が、安山岩等を主とする能登地域、流紋岩、粘板岩等を主とする加賀地域・凝灰岩等を主とする北加賀地域の3つの流通圏が確実に重なり合って存在していたことが看取されることである。このことは、大陸系磨製石器の導入・定着するに際して、少なくとも中期後半には石材の供給・需要ルートが構築されていたことを傍証すると考えられる。ただし、石材はその種類によって選択がなされていたと考えており、多様な生産・流通ルートがあったと考えている。

4. おわりに

本稿では弥生時代における磨製石庖丁について、石川県での研究史を振り返って整理を行った。

また、強引な論の展開ではあるが、磨製石庖丁を切り口に流通圏が加賀、能登地域と大きく括られ、新たに北加賀地域にも流通圏のあることを指摘した。今後、他の種類の石器を検討することによってより多様な形態が導出できると考える。

近年、各地で詳細な検討がなされてきており、飛躍的に研究が進展している。今後、製作工程や穿孔形態のあり方を視野に入れた整理を行い、消費地から見た石材の流通を再検討する必要がある。このことは、磨製石庖丁に限った事ではなく、他の種類にもいえよう。

最後に、本稿に際し、以下の方々にご教示いただいた。記して感謝の意とします。

荒川和哉、伊藤雅文、大野淳也、戸谷邦隆、仲原知之、西森正晃、久田正弘、藤 則雄、町田勝則、町田尚美、宮田 明、業天唯正、安 英樹、和田龍介

註

1. 太型蛤刃石斧、磨製石庖丁、扁平片刃石斧、柱状片刃石斧、磨製石剣等の石器群を便宜的に総称するのに用いた。
2. 他の資料は資料的な制約があり、磨製石庖丁は他よりも数量がある。また、打製石庖丁とされる形式については今後整理される必要性があるため、本稿では検討対象外とした。
3. 石川考古学研究会編 1955 「資料点描 20」『石川県考古学研究会会誌』第7号 石川考古学研究会
4. 浜岡賢太郎 1956 「鹿島郡御祖村石庖丁出土遺跡略報」『石川考古学研究会会誌』第8号 石川考古学研究会
5. 埋蔵文化財研究会編 1992 「第31回埋蔵文化財研究集会 弥生時代の石器 - その始まりと終わり」 埋蔵文化財研究会
6. 安 英樹 1995 「北陸の大陸系磨製石器」 月刊考古学ジャーナル No. 391 ニューサイエンス社
7. 久田正弘 「石川県の石器」『農耕開始期の石器組成 4 中部・近畿』国立歴史民俗博物館資料調査報告書 7

- 国立歴史民俗博物館
8. 木田 清 1999 「石製穂積具」『石川県考古資料調査・集成事業報告書 農工具』 石川考古学研究会
 9. 安 英樹 2001 「北陸における弥生時代の拠点集落について」『石川県埋蔵文化財情報』第6号 (財)石川県埋蔵文化財センター
 10. 久田正弘 2002 「北陸地方における農具と使用痕」『第7回石器使用痕研究会 弥生文化と石器使用痕研究～農耕に関わる石器の使用痕～』 石器使用研究会・大阪府弥生文化博物館
 11. 小松市教育委員会 2003 『八日市地方遺跡発掘調査報告書』
資料の実見に際し、宮田明氏により便宜を図って頂き、示唆に富むご教示をいただいた。
 12. 安英樹氏よりご教示いただいた。
 13. 戸谷邦隆氏よりご教示いただいた。
 14. 同註 9 文献
 15. 同註 8 文献
景山和也 2001「収穫具」『石川県考古資料調査・集成事業報告書 補遺編』石川考古学研究会
 16. 藤則雄氏よりご教示いただいた。
 17. ここでは大きく加賀地域と能登地域と便宜的に分ける。
 18. (財)石川県埋蔵文化財センター・石川県教育委員会 2004 『戸水B遺跡(10・12・13次)発掘調査報告書』
(財)石川県埋蔵文化財センター・石川県教育委員会 2003 『畝田・無量寺遺跡、畝田B遺跡発掘調査報告書』
松尾 実 2004 「津幡町 加茂遺跡(第9次)の調査 - 弥生時代の建物跡群を中心に - 」 平成15年度発掘速報会『よみがえる石川の遺跡』資料 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
 19. 上田尚美 1998 「富山県内の石庖丁について - 下老子笠川遺跡出土の新資料から」『富山県考古学研究』創刊号 (財)富山県文化振興事業団埋蔵文化財調査事務所
資料の実見に際し、荒川和也氏、町田勝則氏、町田尚美氏には、便宜を図って頂き、多くのご教示をいただいた。
そのなかで、当該資料が鹿西町小田中遺跡出土の石庖丁の石材と同質という点について関係性が認められないことが判明しており、今後検証すべき課題である。

[図版出典]

図1：(木田；1999. 景山；2001) を基に作成

図2：(安；2001) を基に加筆・修正

[参考文献]

- 森本六爾 1936 「石庖丁の諸型態と分布」『考古学評論』第1巻第1号 東京考古学会
- 小林行雄 1937 「石庖丁」「考古学」第8巻第7号 東京考古学会
- 石川考古学研究会編 1955 「資料点描 20」『石川考古学研究会会誌』第7号 石川考古学研究会
- 浜岡賢太郎 1956 「鹿島郡御祖村石庖丁出土遺跡略報」『石川考古学研究会会誌』第8号 石川考古学研究会
- 石川県鹿島町史編集専門委員会 1966 「石川県鹿島町史 資料編」 石川県鹿島町役場
- 石毛直道 1968 「日本稻作の系譜(上)」『史林第51巻』第5号 史学研究会
- 石毛直道 1968 「日本稻作の系譜(下)」『史林第51巻』第6号 史学研究会
- 橋本澄夫編 1970 「石川県考古学便覧」 北国出版社
- 酒井龍一 1974 「石庖丁の生産と消費をめぐる二つのモデル」『考古学研究21-2』考古学研究会
- 下条信行 1975 「石器の製作と技術」『古代史発掘』4 講談社
- 酒井龍一 1984 「弥生時代中期・畿内社会の構造とセトルメントシステム」『文化財学報』3 奈良大学文学部文化財学科
- 酒井龍一 1985 「磨製石庖丁」『弥生文化の研究』5 雄山閣出版
- 酒井龍一 1986 「石材の動き」『弥生文化の研究』7 雄山閣出版
- 都出比呂志 1989 「日本農耕社会の成立過程」 岩波書店
- 平井 勝 1991 「弥生時代の石器」(考古学ライブラリー64) ニュー・サイエンス社
- 菅 栄太郎 1992 「弥生時代の石器生産と流通 - 讀岐平野における一様層と近畿地域との関連性」『同志社大学考古学シリーズ 考古学と生活文化』 同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 松山 聰 1992 「石庖丁の使用痕」『大阪文化財研究』第3号 (財)大阪文化財センター
- 埋蔵文化財研究会関西世話人編 1992 「第31回埋蔵文化財研究集会 弥生時代の石器 - その始まりと終わり」 埋蔵文化財研究会関西世話人
- 村田幸子 1992 「畿内における石庖丁未成品の分析」『大阪文化財研究』第3号 (財)大阪文化財センター

- 村田幸子 1992 「石材の伝播について - 河内平野を中心に - 」『河内平野遺跡群の動態』 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- 福宣田佳男 1992 「大阪府の弥生時代後期の石器」『究班』 埋蔵文化財研究会
- 安 英樹 1995 「北陸の大陸系磨製石器」『考古学ジャーナル』391 ニューサイエンス社
- 設楽博己 1997 「弥生時代の交易・交通」『考古学による日本歴史』9 雄山閣出版
- 秋山浩三・仲原知之 1998 「近畿における石庖丁生産・流通の再検討()- 池上曾根遺跡の石庖丁製作工程-(上)」『大阪文化材研究』第15号 (財)大阪府文化財調査研究センター
- 上田尚美 1998 「富山県内の石庖丁について - 下老子笠川遺跡出土の新資料から - 」『富山考古学研究』創刊号 (財)富山県文化振興事業団埋蔵文化財調査事務所
- 福宣田佳男 1998 「石器から鉄器へ」『古代国家はこうして生まれた』 角川書店
- 秋山浩三・仲原知之 1999 「近畿における石庖丁生産・流通の再検討()- 池上曾根遺跡の石庖丁製作工程-(下)」『大阪文化材研究』第17号 (財)大阪府文化財調査研究センター
- 高木芳史 1999 「畿内地方の石庖丁の生産と流通」『国家形成期の考古学』 大阪大学考古学研究室
- 鈴木敬二 1999 「穂摘具の多様性と石材の流通 - 兵庫県玉津田中遺跡におけるケーススタディ - 」『国家形成期の考古学』 大阪大学考古学研究室
- 仲原知之 2000 「和泉地域の石庖丁生産と流通 - 近畿における石庖丁生産・流通の再検討()」『洛北史学 第2号』 洛北史学会
- 寺沢 薫 2000 「日本の歴史02巻 王権誕生」 講談社
- 安 英樹 2001 「北陸における弥生時代の拠点集落について」『石川県埋蔵文化財情報』第6号 (財)石川県埋蔵文化財センター
- 秋山浩三 2002 「石庖丁素材 池上曾根遺跡」「石庖丁製作途中品 池上曾根遺跡」『摂河泉発掘資料精選』(財)大阪府文化財センター
- 仲原知之 2002 「弥生前期の石庖丁生産と流通 - 近畿における石庖丁生産・流通の再検討()」『紀伊考古学研究』第5号 紀伊考古学研究会
- 北条芳隆・福宣田佳男編 『考古資料大観』第9巻 小学館
- 濱野俊一 2002 「三島地域における石庖丁生産と流通 - 大阪府茨木市目垣遺跡における石庖丁生産問題からの二、三の提起 - 」『古代学研究』 古代学研究会
- 久田正弘 2002 「北陸地方における農具と使用痕」『第7回石器使用痕研究会 弥生文化と石器使用痕研究~農耕に関わる石器の使用痕~』 石器使用研究会・大阪府弥生文化博物館
- 秋山浩三 2003 「弥生時代・畿内石庖丁の生産と流通 - 近畿における石庖丁生産と流通の再検討() - 」『道具の生産流通と地域間系の形成~縄文から弥生まで~』古代学協会中国四国合同大会研究発表要旨
- 荒井 格 2003 「東北地方出土石庖丁の製作工程と石材選択」『日本考古学』第15号 日本考古学協会
- 石川県小松市教育委員会編 2003 「八日市地方遺跡」第2分冊(遺物報告編) 小松市教育委員会
- 中川和哉 2003 「近畿地方における粘板岩製石器の生産と流通に関する予察」『同志社大学考古学シリーズ 考古学に学ぶ()』 同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 三浦知徳 2003 「石材の「選択」 - 価値観と指向性」『認知考古学とは何か』 青木書店